



# 養蚕業と製糸工場で栄えた町

大正期の岐阜の産業と人々

桑の実をほおぼり、口の周りを赤く染めていた子供の頃... 昭和50年頃まで、周りにはまだ桑畑や養蚕農家がありました。

1. 養蚕がさかんになった島村 (岐阜県1位、全国で6位の収穫量) 川に囲まれた稲葉郡島村(現在は岐阜市島・早田地区)では、当時畑が年に1、2回水浸しになり、溜まっ



大正9年(1920)岐阜市と稲葉郡島村

た水がなかなか引きませんでした。そこで、短い期間でとれる稗・粟・キビ・かぼちゃ・藍などを作り、秋から冬にかけては大根や麦を作る農業で生計を立ててきました。

明治20年(1887)頃に島村近島に藤井製糸工場ができたこともあって、次第に蚕を飼う家が増えてきました。そして大正時代になると、島村や則武村の多くの家では蚕を飼うようになり、この地域の畑のほとんどが桑畑になりました。

馬県から先生を招いて、養蚕技術の指導を受けました。こんな努力もあって、大正10年(1921)、島村は岐阜県1位、全国6位の収穫量を記録したのです。

## 蚕の飼育 (島田・Yさんの話)

蚕の時期というのは春から秋までで、この辺りでは年に4回飼いました。中でも春の収穫が多く、「春を死なせたら終わりや」と言われた程度でした。その頃大根やゴボウも作っていましたが、何といても繭が高くて売れ収入も多かったので、「お蚕様」と言って、大変大事にしたのです。

でもこの仕事は大変でした。稚蚕の時は、桑の葉の量もそんなに要らず仕事も楽ですが、蚕が脱皮を繰り返して3令から4令、4令から5令になると、それこそ大変でした。8畳間に2列、12段の棚を造って飼いました。繭を作る頃になると、どの部屋も蚕で寝る場所もないほどでした。

朝4時頃起きてすぐ桑を食べさせ、そと(糞)を取り除き、きれいにする仕事)の仕事をしてから朝飯です。この仕事は1時間ぐらいいかかるのですが、たいてい子供の仕事で、それをやっから学校へ行きました。それから何回も桑を取りに行きました。4令の頃は日に5、6回... とにかくたくさん桑をやらねばならず、疲れました。その他の苦労と言えば、寒さや湿気を防ぐことなどでした。蚕は寒いと葉を食べないので、冷たい風が吹き込ま

ないように目張りをしたり、夜は火をおこし、寝ずの番もしました。夏は簾などで涼しくし、しけた時は石灰をまいて乾かしたりしました。その他真夜中に起こされて、蚕に葉をやる仕事を手伝わう時も辛かったです。

## 2. 蚕からとった繭は製糸工場へ

島や則武の農家が蚕を育ててとった繭は、近島にあった藤井製糸工場や川南の忠節町に設立された片倉製糸などに売られました。製糸工場では繭を釜で煮て糸にしたのです。



盆踊りを楽しむ女工達

## 藤井製糸工場に勤めていた人の話

この工場に働く女工さんは最高で600人程いましたが、殆ど寄宿舎に住んでいました。朝は5時頃サイレンがなると一斉に仕事にかかり、夕方まで働きました。遅い日は10時頃まで仕事をしていました。湯気がもうもうと



大正12年・片倉製糸と岐阜市の官庁街

片倉製糸紡績田中製糸所ができました。とても大きな工場で、30メートルもある白い八角の煙突は遠くから眺められ、3棟あった大きな工場は岐阜の人達を驚かせたものでした。ここで働く1000人もの従業員は、13、25歳の若い女工さん達でした。県内の郡上や飛騨、県外の富山県や長野県などの出身者が多く、寄宿舎で生活しながら製糸の仕事をしていました。

## 3. 次々とできた生糸・絹織物工場

大正期になると、岐阜市内とその周辺に、次々と生糸・絹織物関係の工場(製糸工場等)ができました。大正6年(1917)に片倉製糸(忠節町)が進出して来た後、7年(1

918)には大日本紡績(五坪町)、8年(1919)には富士瓦斯紡績(加納町)、9年(1920)には金山製糸(本郷町)、大正12年(1923)には鐘淵紡績(本郷)等が、次々と進出してきました。生糸・絹織物関係工場以外にも、大正4年(1915)には日本毛織(鶴田町 従業員約2000人)、後藤毛織(大宝町 従業員約1500人)、大正12年(1923)に日本毛糸紡績(本郷 従業員約650人)など、毛糸や毛織物などを生産する大工場が相次いで進出してきました。いずれも従業員数が約500人以上の大規模工場で、県外の大資本によるものでした。

この時期に、岐阜市の人口は急激に増加し、大正14年(1925)に



岐阜駅近くの後藤毛織

は8万人をこえました。この事は、大工場に働く職工や家族が大勢、岐阜市に移り住むようになったことを示しています。

しかし「工業の進展」の一方で、各工場で作られる薬品や石鹼、糊料などが忠節用水・清水川・荒田川に流れ込み、「荒田川公害」を引き起こすことになるのです。

この文章は、「岐阜市史」、「岐阜県史」、「島郷土史」、「社会科副読本・しま」、「きふ早田郷土誌」などを参考に、後藤征夫がまとめた。

たちこめる熱い湯の中の繭から糸を引く仕事なのです。作る糸は太すぎても細すぎても検査に通らず大変でした。寄宿舎は12畳の部屋に8人ぐらいたが寝泊まりしていました。月給は平均31円ぐらいたったそうで、少ない子は18円ぐらいで、みんな正月に家に帰る時まで大事に貯めていました。それでも毎月1日と15日の月2回の休みの日は嬉しそうに連れだって、この辺りの店で買い物したりしました。

会社・工場名	所在地	創業年月	従業員数
大日本紡績岐阜絹糸工場	五坪町	大正 7.12	3013
片倉製糸紡績田中製糸所	忠節町6	大正 6. 3	922
金山製糸岐阜支店	本郷町5	大正 9. 3	601
岐阜絹織物株式会社	金町6	明治29. 6	120
徳力絹織物株式会社	高森町2	大正14. 6	50
丸三織物精練整理工場	松鴻町2	大正15.11	46
合資会社忠節製糸工場	忠節町4	大正13. 6	45
多賀織物工場	多賀町	大正 7. 8	28
戸崎染織工場	駒爪町4	大正 8. 5	27
斐太製糸岐阜乾燥場	長住町2	大正 6.11	27
大万乾燥場	苅田町4	明治44. 5	25
大野ポンジ織工場	徹明町2	大正 4. 4	25
林製糸工場	忠節町5	大正 6. 5	24
日本絹織株式会社	加納	大正 6	189
富士瓦斯紡績株式会社岐阜工場	加納	大正 8. 8	1754
鐘淵紡績株式会社岐阜製糸工場	本郷	大正12.10	618
市橋織物工場	鏡島	?	?
藤井製糸工場	近島	明治20年頃	600

大正期の生糸・絹織物関係工場

岐阜市歴史博物館ボランティア  
「お話・岐阜の歴史サークル」  
代表 後藤 征夫  
http://bookgeocities.jp/gifurekisi/kekisrop.htm  
TEL058-231-6726